

開拓地酪農の展開と条件

大分県下郷地区農業調査報告 ②

平 川 一 郎

(福岡県立農業試験場)

HIRAKAWA, I.

Some Factors for success in Dairy Farming of Colonization.
Agricultural Research in Simogo Region Prif. Oita. (2)

1. 問題提起

戦後の開拓は147千戸入植したが現在ではその半分くらいしか残っていないと考えられている。その中で、この地域は脱農が少なく、なおかつ下郷地区の中心的な農家群としての役割を果たしている。そこで、開拓地酪農の成立の条件と下郷における位置づけを明らかにしたい。

2. 鎌城地区の歴史と現状

標高420mの松や櫟の林の台地に昭和27年に長野より24戸、地元より3戸入植、強酸性の土地を約2ha平均各戸に配分した。開拓当初は馬車のおおる道もなく約6kmの山道を人間の肩や牛によって荷がはこばれていた。当初は小家畜、雑穀、麦、野菜、タバコなどが導入されていたが、資本蓄積のすすむなかで、昭和30年に酪農を導入し、あと漸次拡がり、37年に北九州へ牛乳の販路を拡大し出荷体制が確立するなかで、現在は23戸中20戸が酪農家となっている。

50年は酪農家20戸、乳牛377頭、乳量1,112tに達している。トップの農家は113t出荷しており、かなりの水準に達しているといえる。しかし、内容を詳細にみると1頭当平均乳量は4,029kgであり、調査によると未だイタリヤンの収量なども低く、土地改良、乳牛の質の向上、借入金の増大、生活条件の改善の必要性などの問題点をかかえている。また共有地を1haづつ2回にわたって配分しているが、まだ十分とはいえず、脱農者の土地を買受けた農家をのぞいては土地に対する要求は強くみられる。

3. 開拓地酪農の成立と酪農

開拓地の一般的な特徴として、第1に土地改良熟化化、家畜や農機具の整備充実、生活基盤の建設など一般の農

業経営とちがった資本蓄積の過程が必要である。第2に耕境地帯に成立しており、水利に恵まれず、知作中心であり、家畜飼養が必要である(現在の開拓地の51.2%が酪農中心の経営のようである)。

この地域でも一般的な特徴はあてはまっているようであるが、ここの特徴点としてあげてみると、まず第1に商業的農業の展開と資本の蓄積の重要性である。生産、生活両面における資本蓄積を必要とするため、山林を利用しえない開拓地としては、必然的にものを売ることが必要であり、自給的農業が基調である山村の中では特殊な存在であった。この地区では、野菜などの換金作物を2年目から導入しており、下郷農協という販売組織と結びつくことは重要であった。確かに牛乳など乳業資本への出荷も行なわれたが、安心して農民の立場に立てられる組織として、開拓酪農の確立に対して、農協の果たした役割は大きい。また開拓道路の建設も農産物の搬出に大きな役割を果たしている。資本蓄積は良くやってきたといえるがまだまだ不足しており、生活関係の遅れ、牛の品質、借入金の増大などにあらわれている。

第2に土地問題である。この地区は他と同様に土壌条件は良くなかったが、共有地が多く、最終的な配分は4haに達している。このことは現在の酪農経営にとって重要な意味をもつと同時に、共有地の立木の処分などが、生活基盤の確立に大きな力となっていた。ただ現段階では土地の量的質的な不足が目立っている。

今後の問題としては、土地の拡大、技術水準の向上と集約化、平場農村とのつながりなどの問題をもっている。